

下高田遺跡出土 サヌカイト接合資料について

● 川添和暁

美浜町下高田遺跡では、以前からサヌカイトの剥片が入れられた弥生土器の壺が報告されていた。近年、筆者は当該資料を調査する機会を得たことから、本稿に遺物の詳細を報告する次第である。本事例は、伊勢湾岸を挟んだ石材流通の一端を見るのみならず、弥生時代の剥片石器石材の扱われ方について、指標となる事例といえよう。

1. はじめに

剥片石器石材の流通は、地理的あるいは時代的・时期的に使用傾向に偏りが認められる場合が知られている。同じ剥片石器であっても、石鏃、石匙あるいはスクレイパー、打製石斧では使用石材の状況は単一ではなく、広地域の流通を想定できる場合もあれば、小地域集団の解明につながる可能性のある事例まで、その背景は単純ではない。東海地域西部は、複数の石材使用認められる地域であり、上記のような当時の社会性に迫りうる研究を行う上では極めて適したフィールドといえる（川添 2017）。

本稿では、古くから知られていた、美浜町下高田遺跡の事例を紹介する。出土状況の特異性から、弥生時代における当地域の重要性を提示することができるものと考えている。

2. 下高田遺跡の位置と調査の経緯

下高田遺跡は、知多郡美浜町野間字下高田、知多丘陵を東西に浸食した開析谷の開口部に当たる、最奥の砂堆列上に立地する（図 1）。現況は水田となっており、標高は 3～6m を測る。同じ開析谷の開口部に位置する、下高田丸山遺跡とは一連の遺跡群として捉えられている。両遺跡は、弥生前期から後期まで継続した活動痕跡の認められる集落で、知多半島の南西部に所在する遺跡の中でも中心的な存在であったと、評価されている（宮腰 2003）。

下高田遺跡では、これまで正式な発掘調査は

行われていない。遺跡は、昭和 34（1959）年に、杉崎 章によって発見されたという。その後、昭和 41（1966）年には耕地整理が行われ、その際に多量の遺物が出土した。これらの多量の遺物は、遺跡に隣接する密蔵院の住職であった服部秀雄によって、採集された。当時の出土資料は、現在もそのまま密蔵院に保管されている。弥生前期から後期の土器のほか、下呂石・サヌカイト・チャートの打製石鏃・剥片石核類、扁平片刃石斧のほか、シカ・イノシシ・イヌなどの動物骨や、貝殻（ハマグリ・アカニシ）が、確認できる。本稿で紹介する資料は、この時の採集資料で、澄田正一によって紹介がなされている（澄田 1967:以下、澄田論文とする）。以下、同資料についての再検討を行い、再報告するものである。

なお、下高田丸山遺跡では美浜町教育委員会（杉崎 章・磯部幸男ほか）によって、昭和 51（1976）年、学術調査がおこなわれた。

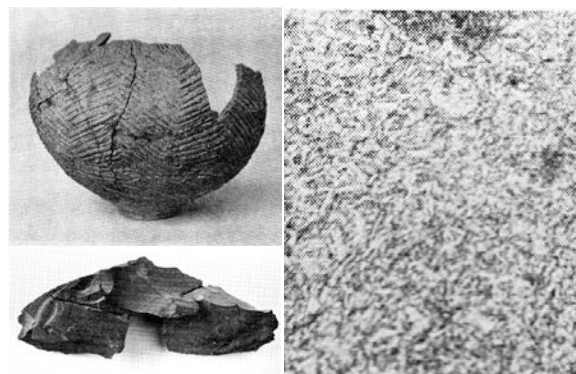


写真 1 澄田論文で紹介された下高田遺跡出土資料
（澄田 1967 より）

【左上：サヌカイトが入れられた壺、左下：サヌカイト
剥片石核類、右：サヌカイト顕微鏡写真

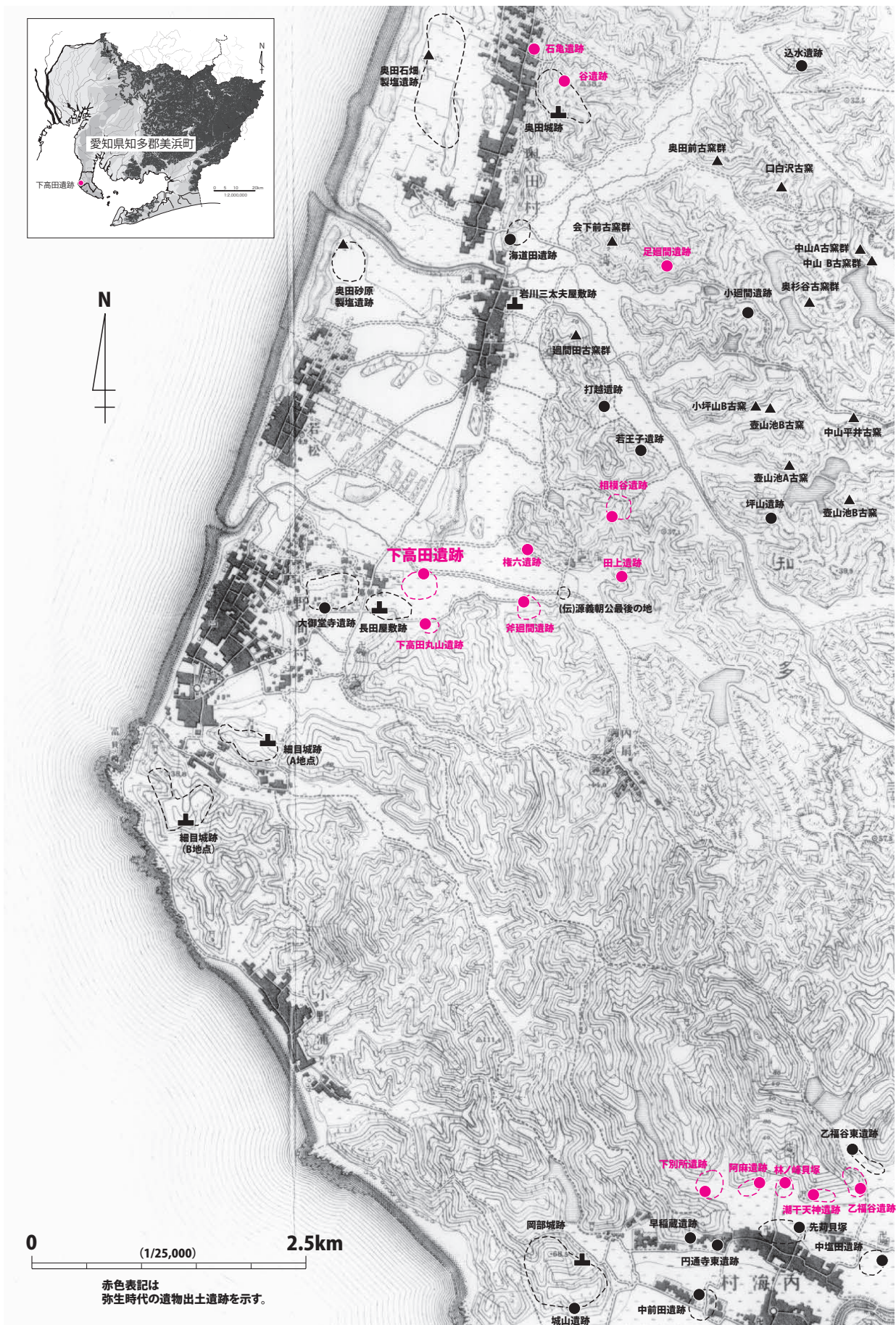


図1 下高田遺跡と周囲の遺跡位置図（明治24年旧陸軍測地部作成2万分の1地形図「野間村」より）

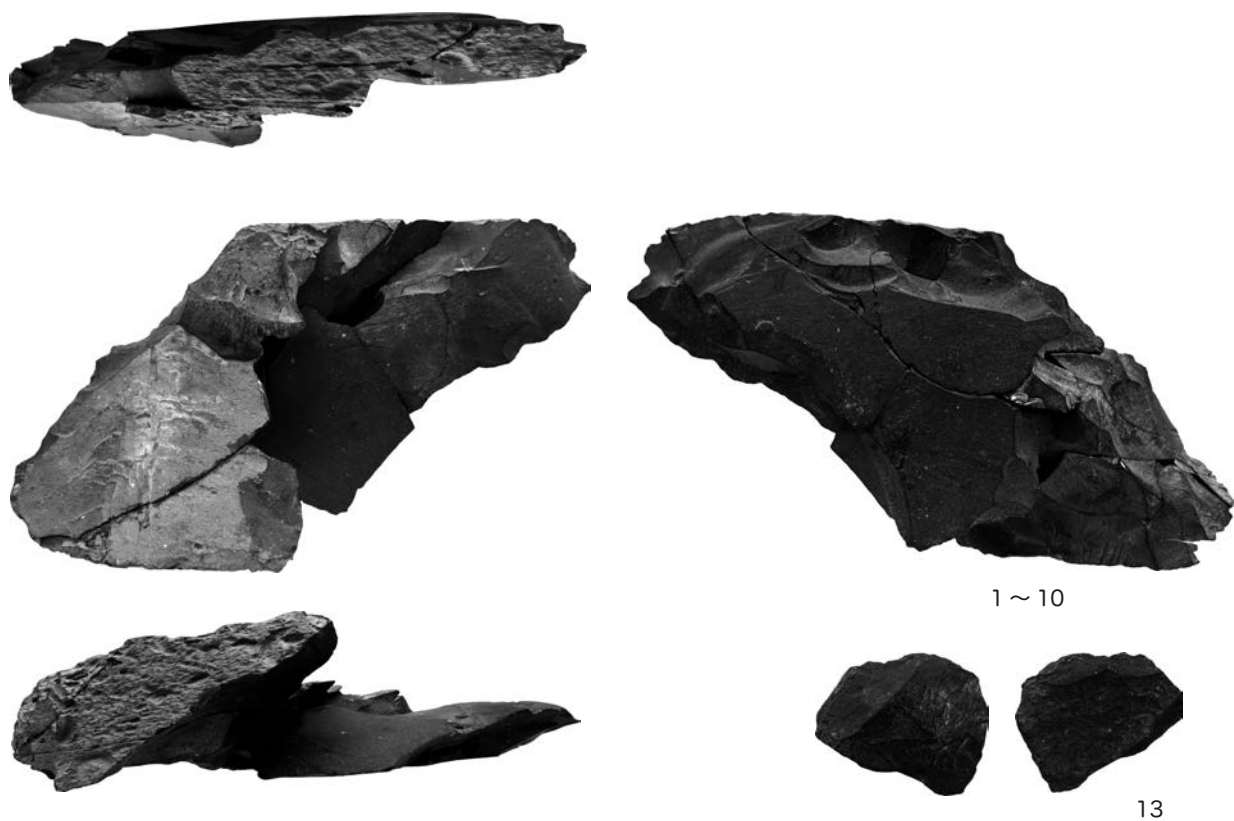


写真 2 下高田遺跡出土 剥片石核類

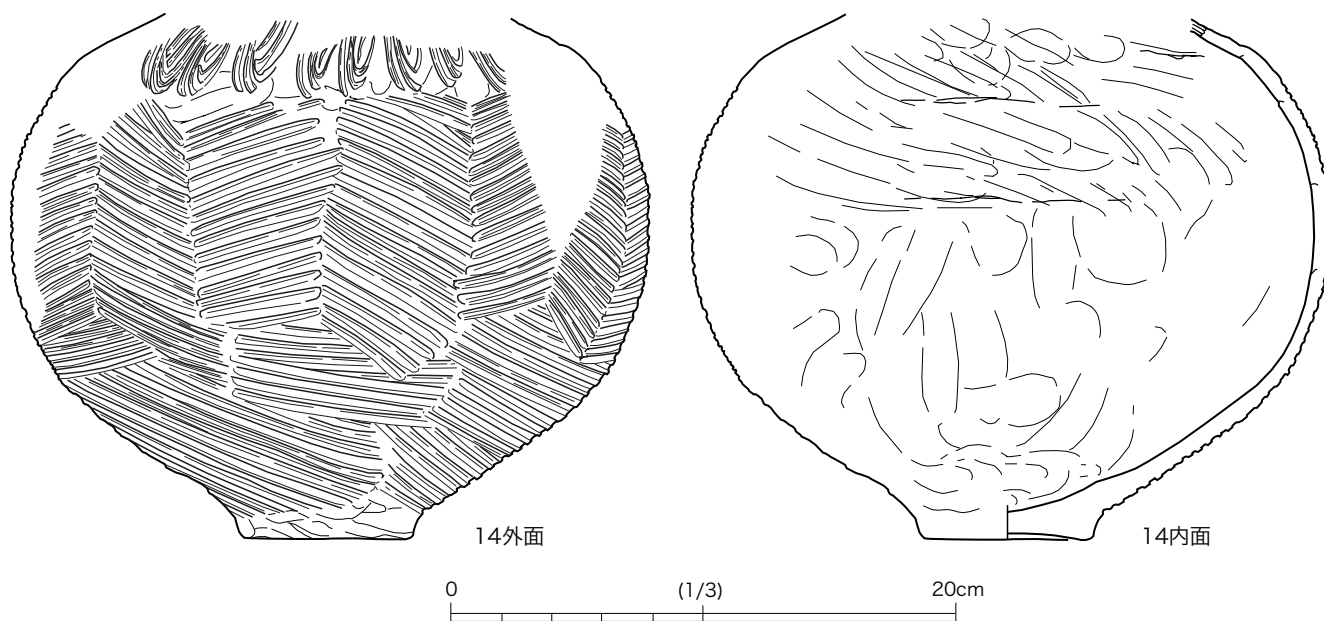


図 2 下高田遺跡 サヌカイト剥片石核類の入れられていた壺

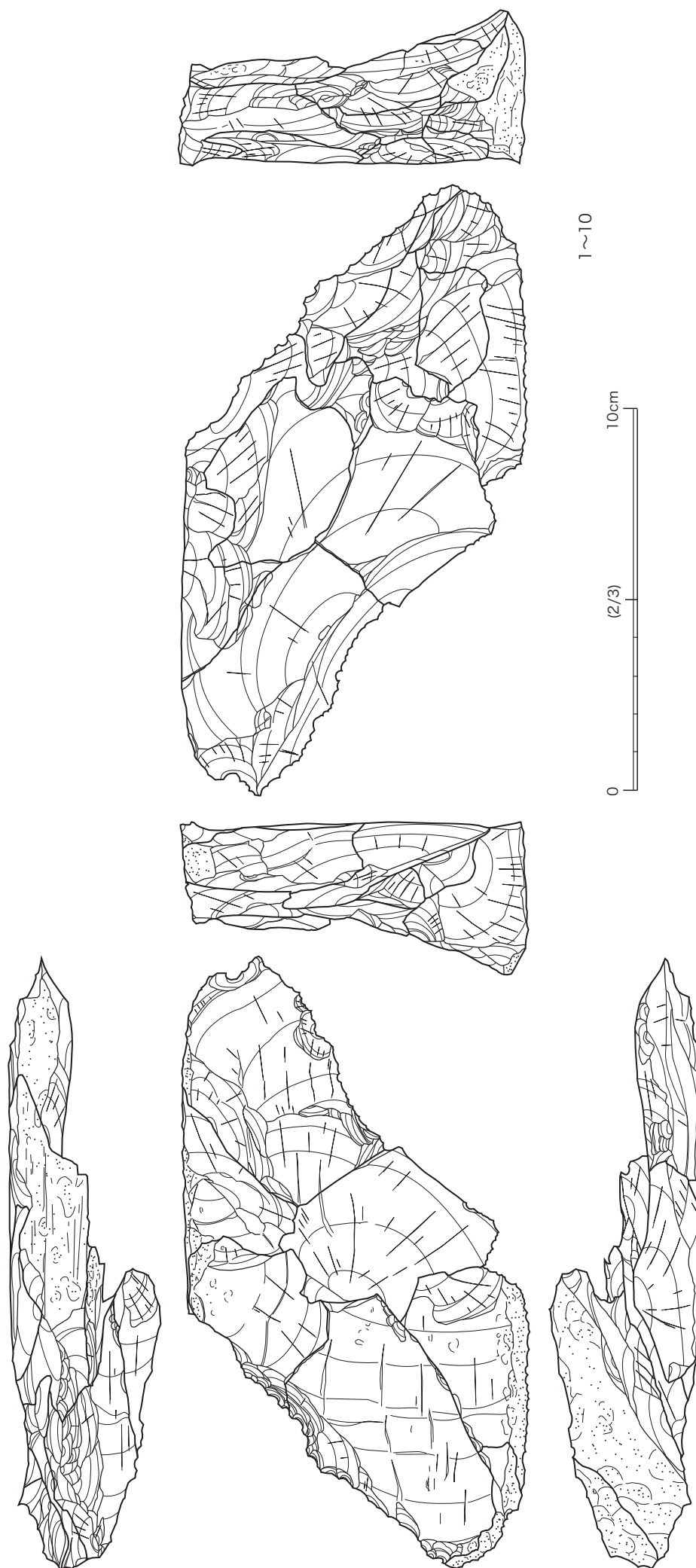


図3 下高田遺跡出土 剥片石核類 1

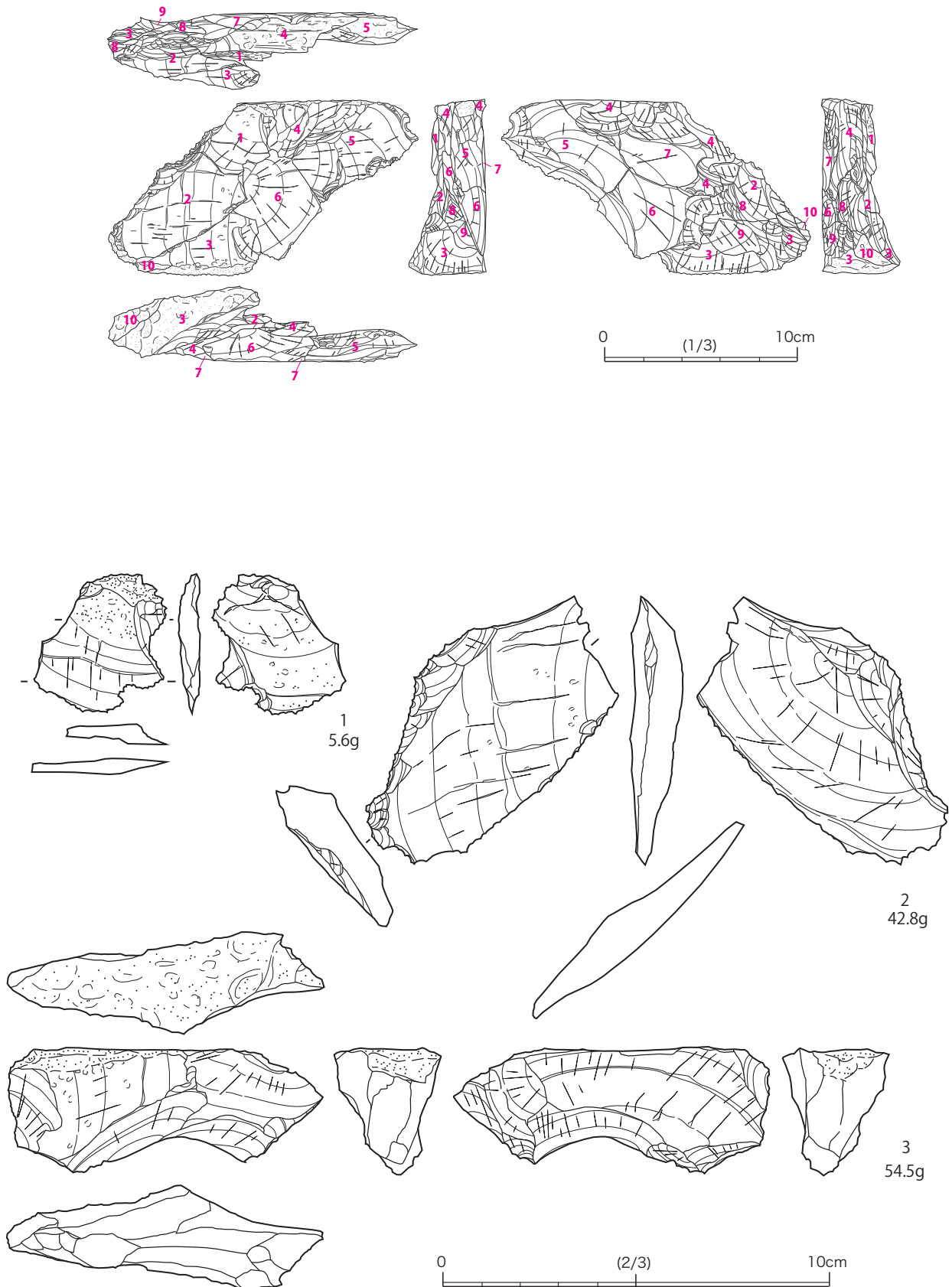


図4 下高田遺跡出土 剥片石核類 2

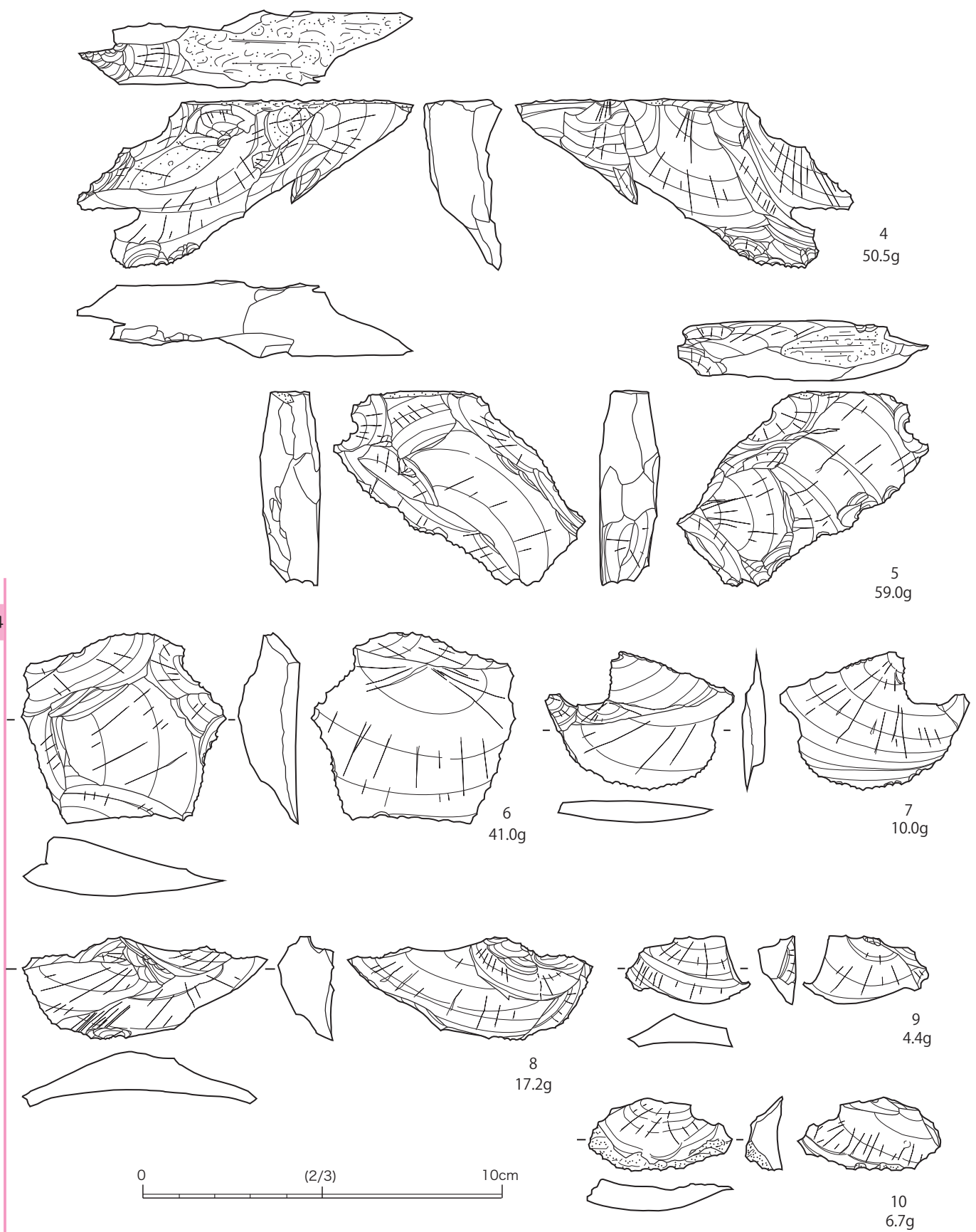


図5 下高田遺跡出土 剥片石核類 3

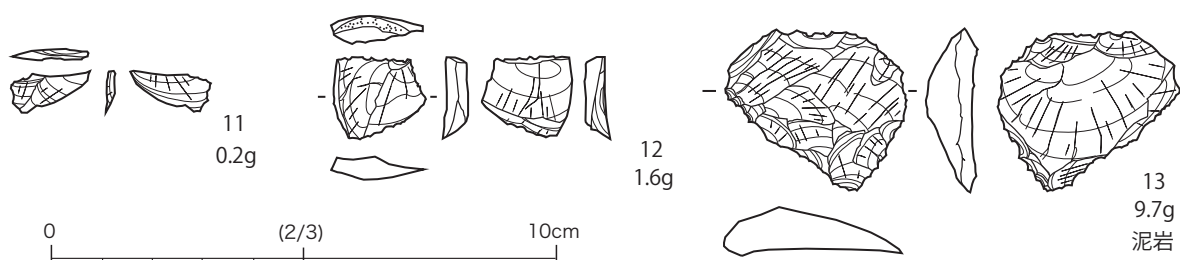


図6 下高田遺跡出土 剥片石核類 4

3. 出土資料について

澄田論文で紹介された内容は、写真1である。条痕のある壺の中から、大小12点のサヌカイトの剥片と、1点の安山岩(?)剥片が入っていたと記されている。サヌカイト剥片は接合することは報告されたものの、当時接合関係を完全には確認できなかったようである。また、注目すべき点としては、顕微鏡写真を提示して、含有鉱物および結晶構造について言及していることがある^{*}。

以下に、筆者の調査内容を記しておく。密蔵院に保管されている資料は、条痕文の壺1点と剥片石核類13点をすべて確認することができる(図2～6・写真2)。剥片石核類の点数がすべて揃っていることから、顕微鏡観察は非破壊によって行われたのであろうか。

条痕文の壺(14)は、胴部から底部の残存で、頸部より上は欠失している。残存高で20.9cm、最大径は25.4cmを測る。球状に胴が張る器形で、頸部には二枚貝条痕によるハネアゲ、胴部上半は二枚貝条痕による縦羽状、下半は斜方向の二枚貝条痕が施されたもので、中期前葉の岩滑式である^{**}。

次に壺内から出土した剥片石核類について見ていこう。1～12は同一石材の剥片石核類で、二上山産サヌカイトである。このうち、1～10

は接合することができた(図3)。その結果、長さ9.1cm・幅16.1cm・厚さ4.0cm、重さ291.7gの板素材になることが確認できた。接合関係が確認できなかった11・12を含めても、約300gのサヌカイトが入れられていたと、表現することができる。接合資料を見ると、1～5・10には、角礫であることを示す礫面が認められ、礫形状の対向する2辺を示すものとなっている。図3の上面観・下面観では、図面左側が厚手で、右側に比べて一枚厚い状態となっている。具体的に示すと、1～3・10が4～9に対して被さっているような状態となっている。このうち、1～3には節理とおぼしき面での割れが生じた可能性があり、2と4の上に重なるように接合する1では、表裏両面に同様の節理面が認められるのである。以上のことから、接合の結果、4～6に重なる節理面を有する部分は存在しないことが明らかになった。この板素材の分解に関しては、まずは5・6の側面側および2・3・4の裏面側に対して敲打が行われたと思われる。しかし、最終的には5・6が示すように、板素材中央から外に向かって力が掛かったことにより、板素材が大きく分解されることになったと推測される。以上の結果、3～5のような石核状のものと、1・6～10の剥片が形成されることになった。剥片は横長となっているもの多く、2・6とやや大型のものはスクレイパーの素材に、7～10の小型のものは打製石鏃の素材に対応可能なものと考えられる。

^{*} この分析は、当時の名古屋大学理学部地球科学教室・岩石学鉱床学第二実験室の諏訪兼位らによって行われた。澄田論文の主旨は、石材同定に顕微鏡観察を導入することの有効性を述べたもので、二上山サヌカイトと香川県産のサヌカイトの違いについても言及している。澄田論文では一宮市元屋敷遺跡出土剥片についても石材同定を行っており、顕微鏡観察の結果、サヌカイトではなく、黒雲母安山岩とした。この石材は、現在、下呂石と言われている石材である。当地域の遺跡出土石器石材について、機器を用いた岩石学的な検討はこれが初出であり、その意味においても澄田論文は大いに顕彰されるべき業績である。この経緯について、岩野見司氏から貴重なご教示を賜った。

^{**} この土器は接着剤によって頑丈に接合されており、現在も澄田論文に掲載された状態から変化はない。密蔵寺に所蔵されている他資料の接合状況とは明らかに異なることから、この土器の接合作業は、名古屋大学で行われた可能性が高い。

一方、13は石材が異なり、澄田論文では安山岩(?)とされたものである。表面に筋の多い石材で、一見金山産のサヌカイトとも思われた石材ではあったが、泥岩であった*。

4. 下高田遺跡出土資料の評価

尾張・三河地域へのサヌカイト搬入ルートとして、伊勢志摩地域から伊良湖水道を渡るルートが主要なものとして挙げられる。小島隆はサヌカイトの出土数量は海岸側から内陸部にかけて減少していく現象を指摘している(小島1993、本稿図7)。また、田原市保美貝塚でのサヌカイト大型石核あるいは原石の出土は、上記の搬入ルートをサポートするものである(図8)。この下高田遺跡事例も、同様の海上ルートによる搬入が想定されるものであり、知多半島域へのサヌカイト搬入ルートを具体的に示す事例となっている。なお、22は金山産サヌカイトの可能性が指摘されている(川添2016)。

一方、剥片石器石材を壺内に入れた事例として、東海市烏帽子遺跡を挙げることができる(石黒編2003、図9)。この遺跡では、弥生前期の水神平式の条痕系壺に下呂石円礫が35個入れられたもので、出土した土坑は埋葬遺構であった可能性が指摘されている。

出土した下呂石の法量を示したのが、図10である。礫径の長軸は7cmを最大として、最小でも3cmを測る。最も多いのは、礫径4～5cmのものであり、これが当時の烏帽子遺跡付近で流通していた下呂石円礫の法量であったと推測される。法量から主として石鏃対応の石材であったと考えられる。

このように、烏帽子遺跡および下高田遺跡の両事例を見た場合、(a)剥片石器石材がまとまって埋納されている点、(b)埋納された土器が当地に根ざす条痕系壺である点、が特に注目される。下高田遺跡に関しては、出土記録のないため現状としては推測の域を出ないものの、烏帽子遺跡のように土坑墓内からの出土であった可能性も考えられよう。弥生時代の前期から中期にかけて、知多半島域ではこのような副葬品を入れる風習が広がっていた可能性もあり、今後の類例検出に期待されるところである。

本稿を草するに際し、以下の方々からのご教示・ご配慮を賜った。ここに感謝の意を表する次第である。

岩野見司・岡田憲一・蔭山誠一・田部剛士・服部秀弘・堀木真美子

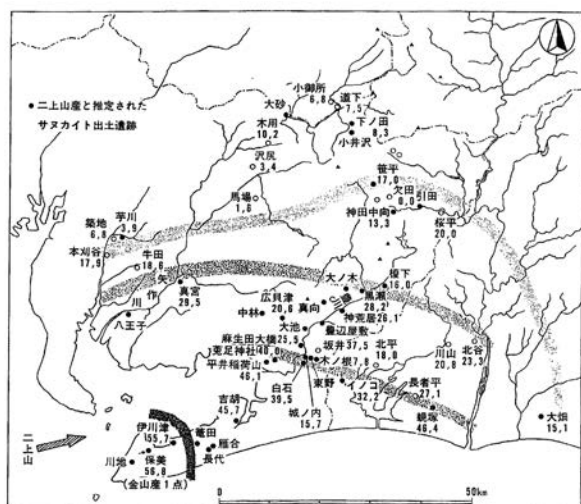
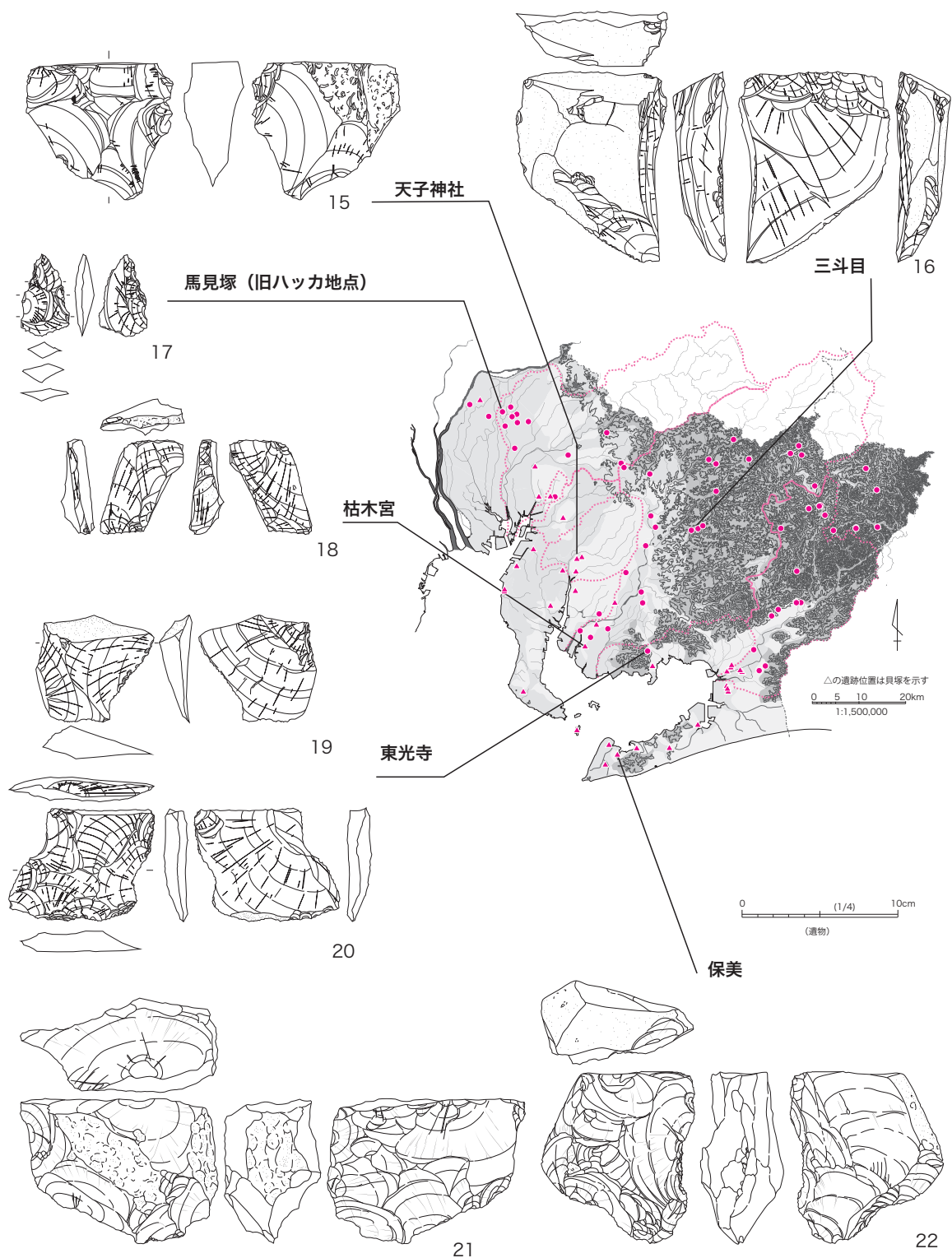


図7 サヌカイト製小型石器の分布の様子
(小島1993より)

* 堀木真美子氏のご教示による。



縄文時代後期資料

15：天子神社貝塚（刈谷市）、16：三斗目遺跡（豊田市）

縄文時代晩期資料

17：馬見塚 旧ハッカ地点（一宮市）、18：枯木宮貝塚（西尾市）、
19・20：東光寺遺跡（幸田町）、21・22：保美貝塚（田原市）

資料の保管

15：刈谷市、16：豊田市教育委員会、
17：一宮市教育委員会、18：西尾市立寺津中学校、
19・20：愛知県教育委員会、
21・22：南山大学人類学博物館

図8 尾張・三河地域 縄文時代後晩期出土サヌカイト剥片石核類（川添 2016 より改変）

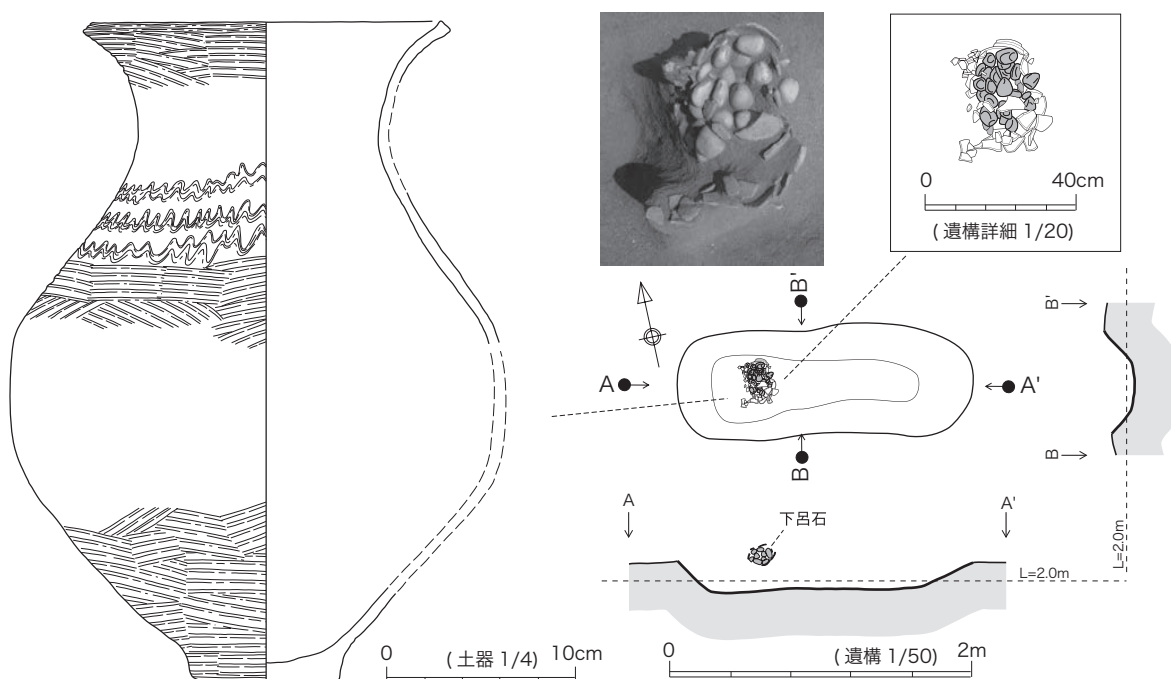


図9 東海市 烏帽子遺跡 00区 SK13 遺物出土状況 (石黒編 2003 より改変)

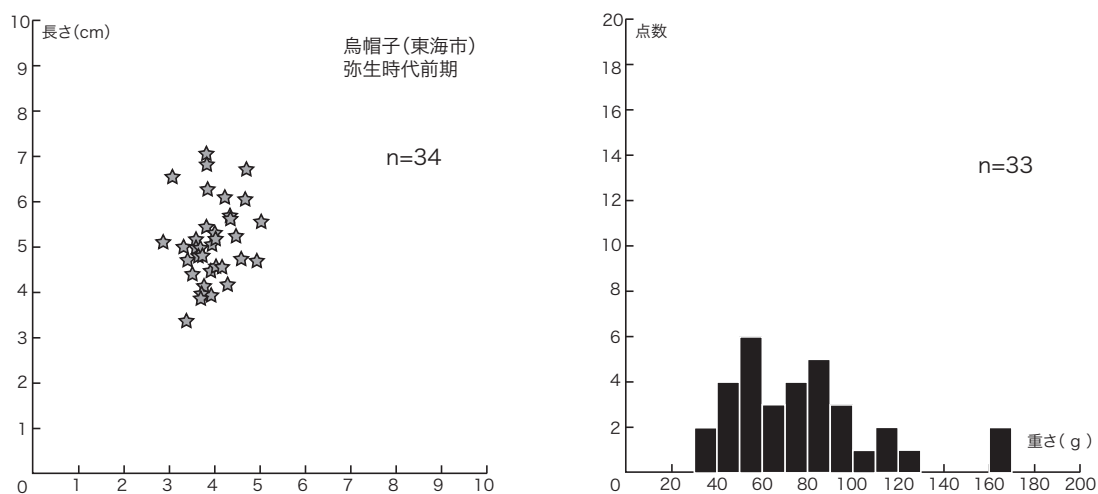


図10 東海市 烏帽子遺跡 00区 SK13 出土下呂石の法量

参考文献

- 川添和暁 2016「縄文時代後晩期における剥片石器石材について―尾張・三河地域の剥片石核類から―」『研究紀要』17.11～30頁 愛知県埋蔵文化財センター
 小島 隆 1993「東三河地方を中心にした石鏃素材の分布と流れ」『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』99～111頁 豊川市教育委員会
 澄田正一 1967「伊勢湾沿岸に分布するサヌカイト(讃岐石)について」『末永先生古稀記念 古代学論叢』419～431頁 末永先生古稀記念会

報告書など

- 石黒立人編 2003『烏帽子遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター第117集
 宮腰健司 2003「下高田遺跡 下高田丸山遺跡」『愛知県史資料編2 考古2 弥生』319～321頁 愛知県
 山下勝年・奥田弘成ほか 1985『美浜町誌』資料編二 美浜町役場